

ドイツ革命と「民族ボリシェヴィズム」(3)

勝 部 元

第6章 ルールの軍事占領と危機の爆発

(一) ルールの軍事占領と政治・経済的危機の爆発

フランスの対独強硬派ポアンカレ政府は23年1月11日、木材、石炭の賠償交付不履行(ヴェルサイユ条約第8篇第2付属文書第17号違反)を理由に、ベルギーとはかって、ルール地方を軍事占領した。占領軍はハム(Ham)とドルトムント(Dortmund)の間に哨所をもうけ、厳重な検問を行ない、占領地域と非占領地域との境界をきびしく守らせた。総計8万7000人の軍隊が送られ、また1万人の仏人、1万人のベルギー人鉄道従業員が派遣せられ、ドイツ当局が撤退した運輸手段を接收した。結果、7万1145人のドイツ人がルール地方から追放された。この人々の面倒をドイツ政府はみなけねばならなかった。クーノー政府は、1月20日、つぎのような声明を出した。「ルール地方にたいするフランス及びベルギー政府の行動は国際法とヴェルサイユ条約の重大な侵犯である。この理由により、占領行動を執行するためのすべての命令や指示はすべて法的に無効である。……従ってドイツ政府は占領権力の命令には服従せず、もっぱらドイツ政府の命令にのみ従うことを命令する」¹⁾

これが「受け身の抵抗」とよばれるものであった。すなわち「ドイツ政府は闘争をはじめた。ルール地方に派兵した国には今後一切の現金支払または現物給付を禁止した。ドイツの役人はルール地方ではいかなる援助をも侵入

1) Werner T. Angress, Stillborn Revolution, The Communist Bid for Power in Germany, 1921-1923 Princeton University Press 1963 p.282

した外国軍隊に与えてはならなかった。これらの指令は遵守された。フランスの將軍たちは、本省官吏のルール地方からの追放とドイツ鉄道の撤去をもって応えた。フランス部隊とドイツ住民との関係は被占領地域で悪化の一路を辿った。」しかしこの「受け身の抵抗」は企業家たち自身によって妨げられた。「鉱山所有者は営業を続行した。というのも、あらゆる国家補償にもかかわらず生産の休止によって生ずる損失を負担する気は全くなかったからである。フランスはルール地方占領後すぐに石炭をドイツの占領されていない地域へ移出するのを一切禁止した。ドイツの企業家たちは、占領地域の住民や工業のために石炭は採掘されねばならぬ、また、フランスとドイツが和解した時すぐにも非占領地域に供給できるように石炭を蓄積しなければならぬ、と言い逃れていた。『愛国的』企業家のかような見地は貫きとおされた。こうしてルール地方の石炭採掘は確かに異常な事態によっていろいろと拘束されたり妨害されはしたが、一度も停止されたことはなかった。』²⁾

しかしルールの軍事占領は、ドイツの経済的・政治的危機をひきおこし、短期的に頂点に導いた。すなわち「インフレーションの危機は戦後ドイツの社会的構造のもっとも深刻な動揺を示した。全社会はその根底まで掘りくずされ、ほとんどすべての階層が現存の秩序にたいする信頼をなくしたのである。』³⁾

インフレの歩みは怒濤のようにドイツ経済を襲い、物価は天文学的水準に達した。それはつぎの統計にみることができる(表1)

熟練労働者の実質賃金の下落は著しく、1913年を100とすると21年78、22年68、33年48と戦前の約2分の1に落ちた。⁴⁾ 失業者の増大も著しく自由労働組合連合の組合員中のパーセンテージは23年3月、5.6%、4月7.0%、5

2) アルトゥール・ローゼンベルク著吉田輝夫訳「ヴァイマル共和国史」思想社154-155ページ

3) Ossip, K. Flechtheim, Die KPD in the Weimarer Republik Junius 1986 S. 139 邦訳「ワイマル共和国期のドイツ共産党」ぺりかん社168ページ

4) Bry, Wages in Germany pp. 453-4 BenFowks, Communism in Germany under the Weimar Republic Macmillan Press 1984 p.95

表 1

1 金マルク	
1923年 1 月	4, 300 マルク
5 月	11, 400 //
6 月	26, 200 //
7 月	84, 200 //
8 月	1, 100, 000 //
9 月	23, 500, 000 //
10月	600, 000, 000 //
11月	522, 000, 000, 000 //
12月	1 兆 //
1 ドル	
1923年 8 月31日	10. 3百万マルク
9 月14日	90. 4 //
10月 1 日	242. 0 //
11月20日	4. 2兆 マルク

月6.2%, 6月4.1%, 7月3.5%, 8月6.3%, 9月9.9%, 10月19.1%, 11月23.4%, 12月28.2%⁵⁾となっている。

消費物価やパンの値上がりは天文学的な数字になった。「一片のパンのために10億あるいは一兆とさえ紙幣を差出さなくてはならぬようなばかげた数ヶ月が続いた。事実ドイツの貨幣はあらゆる価値を失ってしまった。」「4月から10月にかけて実質賃金は減少の一途を辿った。というのも、労働者に支払われた莫大な額の紙幣マルクは、ほとんど購買力を失っていたからである。その結果は広汎な国民大衆の恐るべき窮乏状態であった。ある消息通の観察

5) E. C. Schöch: Arbeitslosigkeit und Rationalisierung, Die Lage der Arbeiter und die Kommunistische Gewerkschaftspolitik 1920-28, Frankfurt 1977, s. 233 Ben Fowkes ibid p. 221

者がこの怖ろしい年の10月をとって算定したところでは、1週間完全に就業した熟練労働者の賃金では100ポンドの馬鈴薯を買うのが精一杯であった。1ポンドのマーガリンの代金を払うには、9時間ないし10時間の賃金が必要であった。1ポンドのバターのためには、労働者はまる2日働かなくてはならなかった。100ポンドの煉炭は12時間もの賃金に値した。1足の質素な靴は6週間の稼ぎを、1着の衣服は20週間の賃金を必要とした。』⁶⁾

このインフレの犠牲者はドイツの中間層、労働者、俸給生活者だった。ドイツの預金者はいまやさいごの1マルクまで失ってしまった。

ルールの軍事占領は、全国民的憤激の嵐をまきおこし、民族主義者の勢力を著しく増大させた。分離主義者をつかってラインラントとルールをドイツより切り離し、ラインラント共和国を独立させようとするフランスのもくろみは成功しなかった。占領地域の大企業の労働者は失業に抗し、物価値上りに抗して、激しいストやデモを行なった。これは必然的に占領者と労働者の激しい衝突をひきおこし、「受け身の抗抵」を「積極的抵抗」にかえつつあった。たとえば3月31日エッセン (Essen) のクルップ工場の5万3000人の労働者は、フランスの軍隊がトラック徴用のために工場に侵入したことに抗して、職場を放棄し、大デモを行った。占領当局はデモの大衆にたいして発砲し、13人の労働者が死亡し42人が負傷するという大事件となった。(エッセンの虐殺) また4月13日、ミュールハイム (Mülheim) の労働者は、(挑発にのるなという指導部の指令を無視して共産党員の労働者も参加していたが) 市役所を占拠し、市の行政機関を握り、「労働者支配の第一歩」をふみ出そうとした。

驚愕したドイツ政府は占領軍当局の了解のもとにナチス、治安警察 (Schupos) を派遣し、血の弾圧を行った。この結果10名の労働者が死亡、70名が負傷するという大惨事となった。(「ミュールハイムの虐殺」)

5月に入ると暴動の波はさらに頂点に達する。有名なシュラーゲター事件

6) ローゼンベルク前掲書156-157ページ

の勃発である。右翼の義勇軍^{フライコープ}のハインツ組織 (Organisation Heinz) の中尉であったアルバート・レオ・シュラーゲター (Albert Leo Schlageter) 一派は3月15日デュッセルドルフ (Düsseldorf) とデュイスブルク (Duisburg) の中間点のカルクーム (Calcum) の鉄橋の爆破を企てたかどで、4月7—8日に逮捕された。かれは5月10日に軍事法廷で死刑を宣告され、5月26日、銃殺された。かれは、たちまち民族的英雄、殉難者、積極的抵抗の英雄とされたのである。かれはまた右翼だけでなく、左翼のドイツ共産党にも「反革命の英雄」としてたたえられた。ラーデクの有名な「シュラーゲター演説」と「シュラーゲター路線」の登場である。これについては後述する。

ここでドイツ共産党とコミンテルン執行部がドイツのこの情勢を如何に評価し、如何なる方針で指導したか、を見ねばならぬ。「民族ポリシェヴィズム」の第2幕が上り、それはやがて全面的に開花する。

(二) コミンテルン指導部とドイツ共産党の方針をめぐる論争

ドイツ革命にかんする古典的著作「死産した革命」 (Stillborn Revolution, The Communist Bid for Power in Germany 1921-23) の中でウェルナー・アングレス (Werner T. Angress) はつぎのようにのべている。

「ドイツで革命を開始し、プロレタリアートが権力を握る、という目標を達成するすばらしいチャンスがやってきた。」しかし、「1923年、ルール占領から、クーノー政府の辞職にいたる7か月間の共産党の政策には凝集力も統合性も明確な方向づけもなかった。」⁷⁾ ドイツ共産党はこの重大な時期に右派＝主流派と左派との間の激しい対立に悩まされ続けた。大衆の支持の獲得という点では表面的には全分派が一致していたが、左派は社会民主党をふくむ統一戦線政策に激しく反対し、即時権力獲得の方針をとった。「労働者政府」のスローガンは右派が「プロレタリア独裁への移行形態」と考えたの対し、左派は即「プロレタリア独裁」を意味するものとみなしていた。したがってブルジョア政府反対とルールの占領者反対を効果的に結びつけることができなかったのである。

これにつけ加えてモスクワの不十分な指導があった。モスクワよりの指令は、しばしば明確さをかきドイツ共産党内のいろいろ異った解釈を許した。モスクワではレーニンは瀕死の床にあり、スターリン、ジノヴィエフ、カメネフの三頭政治対トロツキーの確執が次第に形づくられつつあった。ドイツ党内の左右分派がこのソ連執行部の分派と結びつき、きわめて複雑な様相を示した。ダニエルスはこれをつぎのように分類している。

「ドイツ問題にかんするソヴィエト指導者の区分けはどうにも分類し難いものであった。ラデック（ロシアの左派で、ドイツの右派を支持）、スターリン（ロシアの右派でドイツの左派支持傾向）、トロツキー（ロシアの左派で、ドイツの右派を支持）、ブハーリン（ロシアの右派に近づき同時にドイツの右派を支持）、それにジノヴィエフ（ロシアの右派でドイツの左派を支持）」⁸⁾

フランス、ベルギーのルール占領にたいするソ連の反応は、つぎのとおりであった。フランスがドイツをおさえ、ポーランドと同盟することは、ソ連にとって重大な脅威となる。独・ソ・ラパロ条約（Rapallo Vertrag）やドイツ国防軍のゼクト將軍と赤軍との間の秘密のとりきめ⁹⁾と友好国ドイツの安全を守らねばならぬ。「だから、はじめのうち、ソヴィエトの最高の外交代表たちがとった立場は、世界革命過程をはやめるためヴェルサイユ体制の危機をうまく利用しようとの期待によるよりも、ルール占領が、新しいヨーロッパ戦争の前奏曲となって、ソ連邦を西欧側の新しい攻撃にさらしはしないか、という不安によって示唆されるものであろう。」¹⁰⁾

プラウダの1923年2月15日号は書いている。「ルールの冒険は全ヨーロッパの政治的経済的生活をゆり動かし、他の諸国との経済的關係を必要とするソ連に大きな害を与えている。」

7) Angress, ibid p.288

8) R・ダニエルス国際社会主義研究会訳『ロシア共産党党内闘争史』現代思潮社1967, 173ページ

9) E・H・カー, 富永幸生訳『独・ソ関係史』サイマル書店66-72ページ

10) アルド・アゴスティ石堂清倫訳『コミンテルン史』現代史研究所174ページ

これに反し、ルール占領直後のドイツ共産党はそれをフランスとドイツのブルジョア階級間の紛争とみて、この問題に極めて無関心だった。ルール占領直後のドイツ国会で、この緊急問題の討議の直前に全員起立したにもかかわらず共産党員だけは着席したままだった。共産党を代表してパウル・フレーリヒ (Paul Frölch) はいった。

「われわれは戦争の中にある。そしてカール・リープクネヒトは、労働者階級が如何に戦争政策を遂行すべきかを教えている。かれは戦争にたいする階級闘争を要求した。これがわれわれのスローガンだ……城内平和 (Burgfrieden) でなく国内戦争 (Burgkrieg) を」¹¹⁾

フレーリヒは民族統一戦線を拒否し、また国会がルール事件に抗議する投票をもとめたとき、反対投票をした。1月23日、「ローテ・ファーネ」紙上で、中央部は「ルールの戦闘はドイツの労働者階級の背後で行なわれる二つのブルジョア階級間の闘争である」と分析し、「ポアンカレーとクーノーをルールとシュプレー* で倒せ」¹²⁾というスローガンを出した。

* シュプレーはベルリンを貫通する河の名前

3月8日のパウル・フレーリヒの論文「ルールの闘争とドイツの共産主義者」はつぎのような言葉で結ばれている。

「ポアンカレーにたいする闘争はプロレタリアートの行動としてルール地方における体系的サボタージュによって、また帝国主義軍隊への革命的浸透によって行なわれなければならない。クーノーに対する反対はイデオロギーとしてのナショナリズムと闘うことによって、現状勢の有利さを利用して労働者階級を防衛闘争に導くことによって、また大衆をゼネストに動員するこ

11) Werner T. Angress; Stillborn Revolution The Communist Bid for Power in Germany, 1921-1922. Princeton University Press 1963, 294ページ

12) Gegen Cuno und Poincaré an der Ruhr und an der Spree, ルート・フィッシャーによるとこのスローガンは翌日ラーデクの編集局への介入によって「クーノーをシュプレーで、ルールでポアンカレーを倒せ」というスローガンにかえられたという (R. Fischer, Stalin und der Deutsche Kommunismus, Verlag der Frankfurter Hefte 1948 S. 321.)

とによって行なわねばならない。」¹³⁾

これよりさき23年1月28日より2月1日までライプツィヒでドイツ共産党第8回大会が開かれたが、議題は統一戦線問題と労働者政府の問題で、ルール問題は左派の要求にもかかわらず、議題にもものぼらず*、まったく討議されなかった。

*ルート・フィッシャーによれば、独・ソ関係に悪影響を及ぼすことを恐れてルール軍事占領によって直接ひらかれる革命の展望について討論が禁止されたといわれる。

アングレスはのべている「モスクワよりの指令のないまま、ブランドラー中央部は、これまで確立された統一戦線政策に従う以外目下のところまったく方針がないように見えた」¹⁴⁾

1月末にコミンテルンとプロフィンテルンの共同声明「反ファシズム行動委員会をつくれ」にしたがって3月にはクララ・ツェトキン(Klare Zetkin)を委員長とする委員会がベルリンでつくられた。また「戦争とファシズムにたいする闘争」を目標にフランクフルト(Frankfurt)で国際会議が開かれたが、そこでブランドラー(Brandler)は「革命の波は上昇せず退潮を続けている。主要な任務はプロレタリアートを糾合することである」¹⁵⁾とのべている。

このように全体としてかれらはなりゆきまかせの静観的態度を続けていた。

ルールにおけるフランス帝国主義との闘争という対外闘争と国内におけるクーノー政権との闘争という二つの課題のうち、ドイツ共産党内の主流派＝右派はやがて第一の課題に、左派は第二の課題に集中することになる。また革命的情勢の見通しについては右派はかなり遠い将来のこととし、左派は当面のものとする。

ルール占領をめぐる国際的緊張とインフレによる国民生活の破端をめぐる

13) 「ルール戦争とドイツの共産主義者」Internationale Presse Korrespondenz III No 24 1923-3. 8, p183-184.

14) Werner T. Angress ibid p 299.

15) Ben Fowks, Communism in Germany under the Weimar Republic Macmillan Press 1984 p 92

国内の緊張激化という情勢の変化の中で、政策の転換は、まずコミンテルン執行部でおこった。ソ連の対外政策の必要——ラパロ路線の堅持ということから、ルール占領——ドイツの工業植民地化——国内ブルジョアジーの革命的役割——右翼との民族統一戦線(シュラーゲター路線)という形で民族ポリシェヴィズムは先ずモスクワで結実、理論化される。パヴロフスキー Pawlowski) [オイゲン・ヴァルガ (Eugen Varga)] —— ブハーリン, ラーデクの登場である。つぎにこの経過をくわしくみていこう。

オイゲン・ヴァルガ (Eugen Varga) は経済学者として生涯非教条主義的分析と創造的見解を提示してきたが(例えば第二次大戦後のかれの世界経済分析) またしばしばある種の極端に陥ち入り、修正主義者としてきびしい批判をうけ、自己批判を重ねてきた。1922—23年にかれは「ドイツの新植民地理論」を創造し、ブハーリン, ラーデクらの同意を得た。

このヴァルガ理論はルート・フィツシャーの要約によれば、つぎのとおりである。

「ドイツはヴェルサイユ講和条約の諸条件を工業生産の増大と輸出の増加によってのみ履行することが出来た。輸出超過分は賠償基金として支払われねばならなかった。しかし必要な生産増大はただ外国の借款の助けをかりてのみ可能であったが、協商国はこの借款を担保なしに認可する用意はなかった。結局協商国はドイツの生産の決定的な中核を——鉄道, 予算管理——を握ることになった。そこでドイツはイギリスおよびフランス帝国主義に完全に従属させられた。ドイツの労働者は、外国の上役とともに利潤を分っているドイツの業務管理者の管理の下に、フランスおよびイギリスの帝国主義のために働かされている。ドイツはかくて、仏, 独帝国主義の植民地にかえられ、インドやインドシナと同様、英・仏資本の利潤のため働いている。今日まで植民地は工業の未発達なおくれた農業国だった。イギリス世界帝国の主要なる利益は、イギリスでつくられた商品を原料と農産物と交換することによって上げられた。ドイツは新しい型の植民地の最初の実例である。すなわちド

イツの高度に発達した工業がイギリスの工業システムの中にくみこまれているのである。」¹⁶⁾

こうして「1922—23年にヴァルガ、ブハーリン、ラーデクはドイツ・ブルジョアジーに新しい役割を発見した。すなわち、ドイツ・ブルジョアジーは階級敵からドイツ労働者とほとんど同じように苦しめられている犠牲者となった。すべての階級の協商国反対の民族統一戦線は現在の急務になった。工業植民地ドイツの理論家はドイツの労働運動をそのすべての形態において——右派、左派、中央派、労組幹部、共産主義者——新しい道に導いた」¹⁷⁾

「ドイツの敗北の直後きわめて早いテンポでドイツの協商国にたいする植民地化『エコー・ド・パリ』が正しく指摘するように『トルコ化』が進んだ。ブルジョア国家としてドイツはもはや独立国の体をなしていない」¹⁸⁾

そこで「かれ〔ヴァルガ〕のドイツの情勢の分析（賠償、外国への負債、ドイツ経済の外国による管理）にもとづき、かれはこの国を新しい型の植民地の第一の実例とよんだ。その高度に発達した工業は総体として西方の経済体系に組みこまれた。そこで革命的情勢においてブルジョア民族主義者との戦術的協力が正統化されている。」¹⁹⁾ とジュデコップも解説している。

ルール占領下のドイツをおそった民族主義の大波にたいして沈黙しまたは反対することは、ドイツ共産党の自己孤立化を招くと考えられた。レオニード・フリードリッヒおよびA・フリードリッヒ (Leonid und A. Friedlich) はいち早く指摘している。「民族主義的大波が全ドイツを襲っており、それがいつ鎮静するかは見通せない。これに反対するより、それを利用すべきである。ドイツの中間層——小ブル層がその荷い手である。」²⁰⁾

16) Ruth Fischer ibid S 241.

17) Ruth Fischer ibid p 242-243.

18) E. Pawlowski (Varga); Die Niederlage des bürgerlichen Deutschland im Ruhrkampf, Die Kommunistische Internationale 1923, 6, 8 No 26, S 106.

19) Otto-Ernst Schüddekopf, Linke Leute von rechts. Die nationalrevolutionären Minderheiten und der Kommunismus in der Weimar Republik W. Kohlhammer Verlag Stuttgart 1960, S. 341

1923年3月、ロシア共産党第12回大会でブハーリンは、「1923年のドイツの民族的防衛問題は1914年とは全く異った性格を持っている。社会民主党が1914年8月に城内平和を言明したとき、かれらは帝国主義戦争を支持することになった。これに反し、1923年のドイツは『協商国資本』に抑圧されている国である。ドイツ共産党はこの抑圧と闘っているあらゆる層を自己の側にかちとらねばならない。ドイツの共産党員は今、ドイツ民族の防衛に賛成であると言明する勇氣を持たねばならない。」²¹⁾

ドイツ国内で最初に政策転換を行ない、1月の国際主義の方針をやわらげたのは、党首ブランドラー (Brandler) にもっとも近い理論家アウグスト・タールハイマー (August Thalheimer) であった。かれは最初2月15日の「インタナツィオナーレ」では無署名で、6月8日の「コムニスティエ・インタナツィオナーレ」では署名入りで「ルール戦争の若干の戦術的問題」²²⁾という論文をかき、その中でつぎのようにのべる。

「われわれが明らかにしなければならないことは、その階級の本質は同一であるにもかかわらず、フランスとドイツのブルジョアジーの役割は同一でない、ということである……。われわれの隊列で『植民地化』ということがしばしば叫ばれている。すなわち特殊な種類の植民地化、工業植民地化である。……ドイツのブルジョアジーは、国内にたいしては小ブル的民主主義の無力さのため極めて反革命的であるが、対外的に、客観的には革命的役割を果たすにいたっている」。それはマルクス、エンゲルスがかつて指摘したようにビスマルクが1864年—70年には自己の意志に反して、革命的役割を果たし、セダンの後に「公然たる反革命」となったのと同様の歴史的類似性を示している。

20) Leonid und A. Friedlich; Der Mittelstand, Faschismus, Nationalbolschewismus und die Partei, Die Internationale 1923-2, 15 S. 115

21) Leonid Luks; Entstehung der Kommunistischen Faschismustheorie Deutsche Verlagsanstalt, 1984. S 61

22) Einige taktische Fragen des Ruhrkrieges Die Kommunistische Internationale 26号1923-6, 8

さらにかれはレーニンの1916年の論文「自決にかんする討論の総括」からつぎのように引用している。「この点でヨーロッパを植民地に対置することはけっしてゆるされないということは、明らかではないか？ ヨーロッパにおける被抑圧民族の闘争は、蜂起や市街戦になるまでに発展し、軍隊の鉄の規律に違反し、戒厳の布告を見るところまで行きうるのであるが、このような闘争は遠隔の植民地でずっと大きく発展した蜂起よりも、はるかに強力に『ヨーロッパの革命的危機を激化させるであろう』。アイルランドの蜂起がイギリスの帝国主義的ブルジョアジーの権力にくわえた打撃は、その力は、同じであっても、アジアまたはアフリカにおける蜂起よりも百倍も大きな政治的意義をもっている。」（邦訳全集第22巻418ページ）

つづけてタールハイマーはいう。「われわれは答えることができる。ドイツはアイルランドではない。それは敗北した帝国主義国家である。前者は圧倒的に農民の人口をもった小国であり、独自の帝国主義的役割を果すことはない。しかし敗北し、武装を解除され、細分化と完全な政治的、経済的奴隷化の脅威にさらされているドイツは——たしかに純理論的可能性からみれば将来再び帝国主義国になることはありうるとしても——今日ではまったく帝国主義政策の主体ではなく客体である。」²³⁾

またレーニンは「ユニウス小冊子について」において、帝国主義時代には民族戦争は不可能であるというユニウス（ローザ・ルクセンブルク）の主張に抗して、民族戦争を帝国主義戦争に転換することも可能だし、その反対もありうる、としてつぎのように可能性を指摘している「1914—1916年のこの帝国主義戦争が民族戦争に転化するということは、はなはだありそうもないことである。というのは、前進的な発展を代表する階級はプロレタリアートであって、彼らは客観的には帝国主義戦争をブルジョアジーにたいする内乱に転化させることをめざしているからである。さらにまた、二つの連合の力

23) Einige taktische Frage des Rehrkrieges, Kommunistische Internationale 1923-6, 8 26号

にあまり大きな相違がなく、国際金融資本がいたるところに反動的でブルジョアジーをつくりだしたからである。しかし、このような転化を不可能であるときめつけることはできない。——もしヨーロッパのプロレタリアートがこんご20年ちかくも無力でいれば、またもし現在の戦争がナポレオン戦争のような勝利におわり、生活力のある多くの民族国家の隷属化におわるなら、またもしヨーロッパ以外の帝国主義(第一に日本およびアメリカの帝国主義)が、たとえば日米戦争のおかげで、社会主義にうつらないで、同じく20年ちかくももちこたえたとすれば、そのときには、ヨーロッパにおける一大民族戦争も可能であろう。こういうことは、ヨーロッパの発展の数十年もの後退であろう。これは、ありそうもないことである。しかし、不可能ではない。なぜなら、ときどきはあともどりの大跳躍をすることなく、なめらかに、きちんと前進していく世界史を考えることは、非弁証法的であり、非科学的であり、理論的に正しくないからである。」(邦訳全集22巻358—359ページ)

タールハイマーはいう。「レーニンが1916年に把握した理論的可能性がドイツの場合(またいくらか違った具体的条件の下に)現実化した。しかし、すでに現在では完全に明らかになったことは、つぎのことである。ドイツ・ブルジョアジーは対外的には客観的に民族擁護の役割を果すようせきたてられており、主観的にはこの役割を貫徹するのではなくて闘争のさなかにならば明るい日の下で裏切りを準備することを考えている。」

E・H・カーはこの論文を解説している。

「1918年の敗北は、いま一度ドイツの立場をひっくり返し、ドイツの民族主義を潜在的革命的要因とした。その結果、論理的結論はつぎのとおりである。『世界大戦におけるフランス帝国主義の敗北は、コムニストの目標ではなかった。ルール戦争におけるフランス帝国主義の敗北はコムニストの目標となった』²⁴⁾

しかしさいごの結着をつけるのはプロレタリアートである。「まずドイツ

24) Carr: The Interregnum 1923-24 p 159

のブルジョアジーにルール占領による損害をつぐなわせ、つぎに政府を打倒し、そののち、はじめて革命的なプロレタリアートは侵略者との闘争に片をつける。しかしこの目標の達成されるまでは、共産主義者は社会民主主義と労働組合からかれらが大衆におよぼしている影響力をもぎとらねばならない」²⁵⁾とアングレスはこの戦術を解説している。

このタールハイマー論文は、直ちに国内の左派とドイツの民族主義にはつねに敏感なチェコのコムニストの異論をひきおこした。タールハイマー論文掲載のコミンテルンの機関紙「コムニスティッシェ・インターナツィオナーレ」(Die Kommunistische Internationale) 1923, No. 26号にはチェコのアロイス・ノイラート (Alois Neurath) とフランクフルト地域指導部のゾマー (Josef Sommer) (ヨセフ・ウインターニッツ) の異論を掲載している。ノイラートは「疑わしい論議」という表題でつぎのように反論している²⁶⁾。

かれはタールハイマーのマルクスよりの引用はまちがっているとしてつぎのように指摘する。(一) 当時は比較的若い上昇期のブルジョアジーであった。(二) 1848年の革命はブルジョア革命であった、という2点について、(一) 現在ドイツのブルジョアジーは下降期のそれであり、(二)、当面するのは、ブルジョア民主主義革命でなく、プロレタリア革命であるという2つの理由で間違っている。

「さてそれでは同志タールハイマーの論文公表の目的は何であろうか……こういう考え方がどういう結論に必然的に導かれるかは明らかである。ドイツのプロレタリアートは、なにかんずくドイツのブルジョアジーの『フランス』帝国主義にたいする闘争を支持せねばならない。『一時的』にであり、明言されたものでないとしても、実際には、クーノー、シュティンネス商会と城内平和を結べということだ」。「フランス帝国主義が現在国際プロレタリ

25) Werner T. Angress: ibid p. 304.

26) Eine verdächtigste Argumentation KI 26号 S. 110-113

アートの最強の敵であることはたしかである。全世界の階級意識のある労働者はかれらに反対して闘うことに第一義的地位をもたせねばならない。しかし各国のプロレタリアートはそれぞれ自国のブルジョアジーと闘う試みをするときのみに成果を上げることができる。……この根本法則は1914年以降、今日も不変である。当時も今日もプロレタリアートにとって、最大かつ当面の敵はその国境内にある。当時も今日も民族主義的・排外主義的潮流の影響にまけて譲歩することはもっとも危険な始りである。」²⁷⁾

同じ「コムニステイシェ・インターナツィオナーレ」26号には、ゾマーという筆名でフランクフルト地域の指導者でドイツ共産党左派に属するヨセフ・ウィンターニッツ博士 (Dr. Joseph Winternitz) の論文「ルール戦争とドイツ・プロレタリアートの任務——ブルジョアジーは『客観的に革命的』になったのか」という論文がのっている²⁸⁾。

その論旨はつぎのとおりである。タールハイマーはルール占領にかんしてライプツィヒ党大会で決定されたマニフェストの明確なコムニストの方針から離反し、「党をその実際的結果では致命的誤りに導くにちがいない。」タールハイマーのマルクスやレーニンの引用はまったく的はずれである。それは「われわれを第二インターの社会排外主義者の水準におち入らせ、お互いに相闘っている資本主義的コンツェルンのどのグループの勝利が『進歩的か』というように真面目に問題を出し、それにもとづいてわれわれの戦術を決定しようというものである」、タールハイマーは1916年のレーニンの論文を引用したが「ドイツにおいて何処に類似性があるのか。今日までドイツ・

27) Alois Neurath, Eine verdächtigste Argemeintung Kl. 1923-6, 8 26号 S 110-113

28) Der Ruhr Krieg und die Aufgaben des deutscher Proletariats. Wirkt die Bourgeoisie "Objektiv revolutionär" Kl. 26号 S113-115 Die Internationale, vi No. 7., 4-1号, カーはゾマーをノイラートと同じチェコの共産党員としているが (E. H. Carr; The Interregnum A. History of Soviet Russia 1954, p 160) ドイツ共産党左派とするベン・フォークスの方が正しいと思われる。(Ben Fowkes: Communism in Germany under the Weimar Republic 1984, p 93)

ブルジョアジーがドイツ・プロレタリアートにたいする政治的支配と経済的搾取の権利について本質的にはだれも問題にしていない。ドイツ・ブルジョアジーが一時的に積極的に帝国主義的政策を行使することが出来ないとしても……明日には可能となるだろう。ドイツ・ブルジョアジーの闘争は、その本質からして、第一段階の要求が「民族的自決」を目標とするものでなく、必ず帝国主義的権力地位の再建をめざす闘いである。ドイツのプロレタリアートはこの道を自国のブルジョアジーとともに一步も歩くことは出来ない。しかし労働者階級と支配階級の利益の「一時的」同調についてのべたときビスマルク的政策の類似の事例を誤って引用している。このような協力こそ、タールハイマーの結論に他ならないのである。……これこそすばらしい民族ポリシェヴィズムの完全な仇花ではないか。われわれは共産主義的政策をまったくちがったものとして把握せねばならない。……まさにドイツのブルジョアジーがヨーロッパでもっとも弱いものであるという理由で、その階級支配の経済的基礎がもっとも動揺しているという理由で、プロレタリア革命が当面の課題となっている。したがってわれわれが全力を集中すべき目標はドイツ・ブルジョアジーの打倒、労働者政府の樹立である……それとともにルール防衛闘争を続行せねばならない。しかしフランス帝国主義にたいする決定的一撃はドイツ労働者階級がフランスおよびロシアのプロレタリアートと同盟してドイツのブルジョアジーを打倒したのちはじめて可能である。」タールハイマーは3月1日の「インターナツィオナーレ」の論文で『世界大戦におけるフランス帝国主義の敗北はコムニストの目標ではなかった。ルールの闘争におけるその敗北はコムニストの目標である、』とのべたが、1923年と1914年—18年の間にはそのような差異はまったくないのである。」

ノイラートとゾマーの批判に答えて同じK I 誌26号上にタールハイマーは「1914年と1923年——今一度ルール戦争におけるわれわれの戦術について」²⁹⁾

29) 1914 und 1923, Noch einmal zu unserer Taktik im Ruhrkrieg, Kommunistische Internationale 1923, 6, 3, 26号

という反論をのせている。

「ドイツ共産党と共産主義インターナショナルは、實際上ここに代表されているような戦術をすでに決定している。しかしそれにもかかわらず問題の理論的解明は決して些細なことではない……問題になっているような戦術問題は進行中のルール戦争をこえてはるか遠くにおよんでいる。……それは無条件的にこれらの「戦勝資本主義」諸国の国際的共産党の中心問題の一つとなっている。これにたいする正しい態度をとるか否かが、これらの国々の共産主義運動とプロレタリア革命の運命を決定する。何故ならこれこそ膨大な人民大衆の、労働者階級、都市および農村の小ブル層の生死の問題であるからだ。……ここで欠けているものは、ものごとを一貫してさいごまで考えぬく勇気であり、1923年の事態は1914年のそれとは異っているということ、その結果われわれの戦術は同一のものではありえない、ということである。……1914年と23年との間の相異は、われわれの原理というより原理をそれに適用すべき事実上の状態にある。われわれにたいする批判者の、マルクス主義者として、許すべからざる誤りは、1914年～18年と23年の事実上の世界情勢の間の巨大な変化を理論的に度外視する点にある。……二つに一つである。ドイツの労働者階級は今日この防衛闘争が客観的に革命的目標をもつものならフランス帝国主義にたいする防衛闘争を遂行すべきか、あるいはこの闘争が革命的目標をもっていないならばじめから第二義的、第三義的なもの、むしろゼロとみなすかである。」「ここからかれらが防衛闘争をする限り、どんなドイツ・ブルジョアジーの役割が出てくるだろうか。フランス帝国主義にたいする闘争は所与の情勢の下ではまさしく客観的に革命的である。従ってそれはブルジョアジーとの城内平和であろうか。同志ノイラートはこうした展望をもち出している。」そして「われわれがこういう意図をもつ『民族ポリシェヴィズム』の病気にかかった人々だと信じているようだ。……この任務、ドイツの帝国主義的抑圧よりの解放は、ドイツ共産党の特殊な歴史的任務とみなされる……。われわれにたいする批判者は、ドイツの状態が1914年

と根本的に異っていることをまったく理解しないことからきている。」

「1923年のドイツの状態の根本的事実は何か(一)プロレタリア革命がまだ勝利せず、ブルジョアジーが尚権力を握っていること(二)ブルジョアジーはフランス帝国主義にたいする闘争を遂行して勝利を収めることは出来ないし、その意志もない。かれらはプロレタリアートを犠牲にして降伏するだろうし、かれらはフランス帝国主義に身をゆだねるための有利な条件を勝ちとるためにみな闘っているのである。」

この論争の背景としてルート・フィッシャーは、タールハイマーの背後にはラーデクが、またノイラートやゾマーの背後にはジノーヴィエフがいた、といている³⁰⁾。

ドイツ共産党内の左・右の対立の激化をおそれたコミンテルン執行部は介入した。コミンテルン執行委員会議長としてジノーヴィエフは、中央部＝右派と左派の代表をモスクワに招いて和解会議をもった。4月末に行なわれたこの会議には中央部を代表してパウル・ベトヒャー (Paul Böttcher)、ハインリッヒ・ブラントラー (Heirich Brandler)、左派からはアルカディ・マスローフ (Ackadij Maslow)、エルンスト・テールマン (Ernst Thälmann)、ルート・フィッシャー (Ruth Fischer) が出席し、コミンテルン側からはトロツキー、ラーデク、ブハーリン、ジノーヴィエフが立ち会った。討議のうち左派から4名 (ルート・フィッシャー、エルンスト・テールマン、オットー・ゲシュケ (Otto Geschke)、アルトゥール・ケーニッヒ (Arthur König)) を中央部に入れることが決められた。また右翼的、左翼的誤りを断罪し、中央部が何よりも右翼的要素にたいする闘争によって左派の革命的不信の理由をとり除くことによってのみ、左派的傾向にたいする闘争は成果をあげるだ

30) 「かれは[ジノーヴィエフ]ノイラートやゾマーのタールハイマー反対の論争を激励したといわれる。」(Ruth Fischer; Stalin und der Deutsche Kommunismus Verlag der Frankfurter Hefte 1948, p 432. E. H. Carr; The Interregnum A. History of Soviet Rusia 1954, p 160 の註参照。ただしルート、フィッシャーはゾマーをチェコの共産黨員としている。)

ろうという旨の決議が出された³¹⁾。

ルート・フィッシャーはライプツィヒ大会の綱領「社会民主主義はブルジョアジーの左翼から労働運動の右翼にうつった」というテーゼが断罪されたこと、すべての分派がドイツで革命的危機が全面的に発展していること、権力のための闘争をとくにラインラントやルール地方で「強化し」することで一致した。ブラントラーの提案の共産党員のザクセン、チューリンゲン邦政府への入閣がソ連側に認められた。ラインラントとルール地方の問題は討論されたが徹底的に行なわれず、民族ポリシェヴィズムについては一言もふれられなかった、とのべている³²⁾。

第7章 シュラーゲター路線—民族ポリシェヴィズムの全面開花

しかしこのコミンテルン指導部内の対立は一応表面的に解決したのにすぎなかった。つぎのコミンテルン拡大執行委員会総会で6月20日にラーデクは有名なシュラーゲター演説を行ない、シュラーゲター路線がドイツ共産党の路線として確立する。すなわちラーデクはいう。「……われわれは国際ファシズムにかんする同志ツェトキーンの広汎かつ深刻な報告をきいた……わたくしはこの白髪の指導者同志の報告をふえんじまた補充しようとは思わない。わたくしはそれをもう一度うまく追求することはできないだろう。何故かというわれわれの階級敵ではあるがフランス帝国主義の手先によって死刑の宣告をうけ、銃殺された、ドイツのファシストの死屍がたえず、わたくしの眼から離れないからである……ドイツ民族主義のこの殉教者の運命は、黙殺されてもまた軽蔑的な言葉で片づけられてもならない……反革命の勇敢な兵士シュラーゲターは、われわれ革命の兵士によって、雄雄しく、かつ栄誉なものとして評価されるべきである。かれと同意見のもち主フレクサ (Freksa) は

31) Ben Fowkes; Communism in Germany under the Weimar Republic 1984. p 94.

32) Ruth Fischer; Stalin und der Deutsche Kommunismus Verlag der Frankfurter Hefte 1948, p 317.

1920年に1つの小説を書いた。スパルタクスとの闘いで倒れた一士官の物語を描いたフレクサはこの小説に『空無への旅人』という表題をつけた。真面目にドイツ民族に奉仕しようと欲しているドイツ・ファシストのサークルが、シュラーゲターの運命の意味を悟ることのできないときには、シュラーゲターは無駄に生命を落したことになる、かれの墓碑銘は『空無への旅人』となるだろう……だれに対してドイツ民族は闘おうと欲しているのか。協商国の資本に対してか、あるいはロシア人民に対してか、かれらはだれと同盟しようとしているのか。共同して協商国の桎梏をふり払うためにロシアの労働者および農民との同盟か、それともドイツおよびロシア人民の奴隷化のため、協商国と同盟しようとしているのか……シュラーゲターは死んだ。かれはこの質問に答えられない。かれの墓の前でかれの同志たちはかれの闘争を引きつぐことを誓った。かれらは答えねばならない。だれに抗して、だれの側にたってか、と。……ドイツ民族の大多数は勤労者からなっている。かれらはドイツ・ブルジョアジーがかれらにもたらした窮乏と悲惨さと闘わねばならない。ドイツの愛国的サークルが民族の大多数の事業を自分自身のものとし、協商国とドイツ資本に反対する戦線をつくり上げる決心をしないならシュラーゲターの道は空無への道だっただろう。そのときドイツは外国の侵略に直面して勝利者による不断の危険に直面して、血なまぐさい国内闘争の舞台となるだろう。そして敵にとってドイツを粉碎し分割することがたやすくなるだろう。……ドイツの問題がドイツ人民の問題となるときはじめて、ドイツの問題がドイツ人民の権利のための闘いの問題となるときはじめて、ドイツ人民は、日々友人を獲得するだろう……人民の問題を民族の問題とすることは民族の問題を人民の問題にすることである。無理解から資本のやとわれ者となっている人々と結びついた人々に対しては、われわれはあらゆる手段をもって闘うだろう。しかしわれわれは民族主義的な感情にとらわれている人々の圧倒的多数は、資本の陣営ではなく、労働者の陣営に属していると信じる。われわれはこれらの大衆が道をさがし、それを見出すよう望みま

たじっさいそうなるだろう。全体の事業のために死に赴くことを辞せぬシュラーゲターのような人々が空無への旅人でなくて、全人類のよりよい未来への旅人であるようにすることにわれわれは全力をつくしたかれらのあつい無私の血を石炭、鉄鋼主たちのために流すことなく、自由のために闘っている諸人民との一つの家族の一員となっている偉大な勤労ドイツ人民の事業のために流されるようわれわれは全力をつくすだろう。……ドイツ共産党はこの真理をドイツ人民のもっとも広汎な大衆に対してのべる。何故ならそれは一片のパンのため闘う、工場労働者の党ではなくて、自由のために、全人民の自由のため、ドイツで労働し、苦悩しているすべての人々の自由のために闘っている闘争するプロレタリアートの党であるからである。シュラーゲターはもはやこの真理を知ることができない。しかしわれわれは確信する。数百人のシュラーゲターがこの真理をさと理解するであろうことを。」³³⁾

このラーデクの「シュラーゲター演説」がかれ自身の責任で行なわれたとは信じ難い。なるほどコミンテルン第5回大会^{*}での24年7月1日のラーデク演説では「コミンテルンのシュラーゲター声明に対しては、同志テールマン、同志ルート・フィッシャーおよびマースロウの署名をえたものであり、拡大執行委員会で行なわれたシュラーゲター演説は執行委員会議長の暗黙の合意でなく、文書による合意をえて行なわれたものである。」とのべられている。またテルニク (Ternik) のシュラーゲター演説は誤りではなかったかという批判に対して「同志ジノーヴィエフの7月20日付の手紙を引用することを許して頂きたい。この手紙で同志ジノーヴィエフは「あなたのシュラーゲターに関する論文は『正しく良いものだ』」と記している。それは今一度、

33) Von Gneisenau und Scharnhorst zu Schlageter. Dietrich Möller; Karl Radek in Deutschland, Verlag Wissenschaft und Politik 1976, S 245-249
同じ論文が Leo Schlageter, der Wanderer ins Nichts, Eine Rede Radeks. gehalten in der Sitzung der Erweiterter Exekutive der Kommunistischer Internationale Juni 1923, Karlo, Paetel; Versuchung oder Chance Zur Gesshichite des deutscher Nationalbolischewismus, Musterschmidt Verlag S 271-275 にのっている。

かれが遂行されたシュラーゲター・キャンペーンを同意していたことを示すものだ」といっている³⁴⁾。

しかしジノーヴィエフのこの同意はしぶしぶのものであったように思われる。というのはダニエルスがつぎのように書いているからである。「ラーデクはブハーリンの後援をうけてハインリッヒ・ブランドラーにひきいられる右翼的ドイツ共産党幹部と協力してかれの民族ポリシェヴィズムの方針をドイツにおいて強力に適用していた。」「ジノーヴィエフはこうした慎重な方針をとることができなかったばかりでなく、ロシアにおける自分の政治的立場に対する想念から次第に頑固に反対するようになっていた。」³⁵⁾

この23年のコミンテルン拡大執行委員会総会では、ラーデクはジノーヴィエフの主報告の討論中に発言し「ドイツにおける民族問題はそれ自体特別な重要性をもつ」と強調し、そしてナチスの機関誌「ゲヴィッセン」がドイツ共産党を「日一日と民族ポリシェヴィキになっている闘う党」とよんでいることをあげ、「民族ポリシェヴィズム」とよばれることをもはや拒否しないでつぎのようにのべた。「民族ポリシェヴィズムは1920年にはドイツ共産党が勝利したすぐあとで直ちにそれにとどめをさすだろう將軍を救うための同盟であった。今日しかし民族ポリシェヴィズムは救済は共産主義者によってのみ行われるという感情に浸透されているすべての人々を意味する。ドイツにおける民族 Nation の強調は植民地における民族 Nation の強調と同じで革命的行為である」³⁶⁾

この23年6月23日の拡大総会でチェコ代表のノイラートが、ラーデクの名前に言及せずに、さきのタールハイマー批判の2月論文の趣旨をくりかえした。ベトヒャーが右派の見解を擁護し、ラーデクはかれの閉会の辞の中でノイラートを「風車と闘う男」と非難し、つぎのようにのべた。

34) Protokol Fünfter Kongress der Kommunistische Internationale Verlag Carl Hoym Nach F. S 713-714

35) R・ダニエルス国際社会主義研究会訳「ロシア共産党々内闘争史」現代思潮社 172ページ

36) Inprekorr No. 103 6-21, 23 p 192

「ルールにおけるフランス政府の勝利は、その力を法外に強めるだろう。他方その敗北はヴェルサイユ体制を粉碎し、革命的役割を果す事実となるだろう。こういう状況によって、ドイツの党は自らに言わねばならない。そうだ。「ドイツの労働者階級は、そしてフランス労働者階級をふくめ全世界の労働者階級は、ポアンカレーの打倒に関心をもっている、と」³⁷⁾

ドイツ共産党左派も今まで反対していたこのシュラーゲター路線に同調した。しかしフレヒトハイムの指摘しているとおりの「ルート・フィッシャー・テールマン・グループは、スローガンを極端に適用することによって、動揺している中央部をその路線からそらせようと試みた。ルート・フィッシャーは、とくに民族主義的な学生層を獲得しようとしてのべた。『ドイツ国は…諸君、ドイツ民族主義の側に立つ諸君がドイツ共産党の中に組織されている大衆とともに闘わねばならないことを認識するとき、はじめて救われる。』「反ユダヤ資本をよびかけるものは……そのことを知らないとしてもすでに階級戦士である……ユダヤ資本家をふみつぶせ、かれらを街灯につるせ……フランス帝国主義は今世界最大の危険である。フランスは反動の国である。ロシアと同盟してのみ……ドイツ人民はフランス資本主義をルール地方から追い払うことができる。』³⁸⁾

こうしてシュラーゲター路線＝民族ボルシェヴィズムが全面開花し、大々的に適用されることになった。「ローテ・ファーネ」紙はその6月26日号に「空無への旅人・シュラーゲター」という題でラーデク演説の全文を掲載した。この論文はドイツ共産党員や右翼の急進派の間にセンセーションをまきおこし^{*}、民族主義者との間に公的論争をよびおこした。ルイ・デュポウ(Luis Dupeux)はその「ドイツにおける『民族ボルシェヴィズム』1919—33年」³⁹⁾の中でつぎのように解説している。

37) E. H. Carr The Interregnum A. History of Soviet Russia Macmillan 1954. p 177-178

38) Ossip K. Flechtheim, ibid O・Kフレヒトハイム、高田爾郎訳ワイマール共和国期のドイツ共産党 ペリカン社1986, 170ページ。

* 「この演説がきわどいところでバランスをとっていたことを沈黙しているわけにはいかない」とパウル・ベトヒャー (Paul Böttcher) は言っているし、「全体としてシュラーゲター路線は党内ではあまり人気のあるものではなかった」とジュデコップも指摘している。

Paul Böttcher; Der Weg und Wille zur Macht. Die Internationale VI 15. 8-1 1923, S 426.

Otto-Ernst Schüddekopf, Linke Leute von rechts Die national revolutionären Minderheiten und der Kommunismus in der Weimar Republik W. Kohlhammer Verlag Stuttgart 1960, S 148.

「新政策の実現と事件は三つのレベルでみとめることができる。第一は新聞紙上での民族主義的知識人との討論である。第二は公式の場面での多数の対決, 並びに中間層の多数のグループにおける適切なスローガン, さいごに極めてまれな場合だが, 効果的な協力, たとえばセンセーションをまきおこし, かつまったく純粋な右翼の「民族ポリシェヴィズム」によるもの, ハンス・フォン・ヘンティッヒ (Hans von Hentig) の場合がそれである。」⁴⁰⁾

著名な民族主義者メラー・ファン・デン・ブルック (Moeller vanden Bruck) はその機関誌「ゲヴィッセン」 (Gewissen) 7月2日号の「空無への旅人」と題する論文で, ラーデクの「真面目な民族主義者」への提案をはねつけた。それは倫理的資本主義の未来にかんするかれにとって好ましい厳格な定式, 民族主義者と唯物論者の歴史把握の対立の理由によるものだった。ラーデクはこれに対し「ローテ・ファーネ」7月5日号で「ゲヴィッセンへの回答」を書き, 「ゲヴィッセン」は「ドイツの民族主義的サークルの中で唯一の思索的機関紙であるとみなすが故に, その立場は, 他の民族主義的なドイツのサークルの立場をもまた決定させる。そこでイデオロギー的立場にかんするどんな論争とも離れ, 端的にメラーに具体的問題を提示する。「ドイツ共産党は, 知らねばならないし, 知りたいと思う。ドイツ民族主義の真面目な分子が何を具体的に欲しているのか……その目標を如何にして達成し

39) Luis Dupeux; Nationalbolschewismus in Deutschland 1919-1933. Kommunistische Strategie und Konservative Dynamik Verlag, C. H. Beck. München 1985

40) ibid S 192-193

ようと思っているのか、如何にして犠牲を払うのか、あるいはこの支払いをまぬかれようと思っているのか、結局あなた方はいずれにせよ、襲いかかる大きな犠牲に反対しようと望んでいるのか。……われわれコムニストは回答する。武器をとることによって。これはドイツ政府は工業労働者、勤労農民、精神労働者の代表から構成されねばならぬということを前提としている。」ラーデクはまたこの回答で「ファシズムは士官の一味を代表するのではなくて広汎な相矛盾した大衆運動を代表している」⁴¹⁾と指摘している。

メラーは直ちに7月13日付で「第3の見解」(Der dritte Standpunkt) 7月23日付で「現実」(Wirklichkeit) という表題で反論を書いた。デュポーによるとこれらの論文は「典型的な青年保守派の方法が保たれており、決して融和的なものでなくけわしく拒否的なものであり、論文の調子は軽蔑的なものであった。」⁴²⁾

デュポーはカーの「独・ソ関係史」(German-Soviet Relations between The Two World Wars, 1919-1931 邦訳富永幸生 サイマル出版86ページ)中の叙述——「この演説は、『赤旗』に転載され、またナチ運動の知的代表ともいうべきモエラー・ファン・デン・ブルック『第三帝国。』の著者だが、ナチスではなかった。1925年に自殺」や、極右派の著名な評論家レーベントロー「ドイツ国粹自由党の創立者。のちナチス」などの共感的論説を生んだ。」(傍点筆者)をあげて、これはまったく間違いであり不思議な話だと批判している。(Louis Dupeux "Nationalbolshewismus" in Deutschland 1919-1933 Verlag C H Beck 1985. S. 195)

ついで著名な右翼民族主義者のエルンスト・ツウ・レーヴェントロウ伯(Graf Ernst zu Reventlow)と、ドイツ共産党幹部で右派のパウル・フレーリッヒ(Paul Frölich)との間で論争がおこった。ラーデクが例のシュラーゲター演説の中でシュラーゲターは「国内の敵が打倒されぬ限り、協商

41) Rote Fahne, Dem Gewissen zu Antwort 5, 7, 23

42) Louis Dupeux "Nationalbolshewismus" in Deutschland 1919-1933 Verlag C H Beck 1985, S. 194

国に対するすべての闘争は不可能だと平静にのべたレーヴェントロウ伯と同意見であったことはたしかだ。」と呼びかけていた。しかしレーヴェントロウにはこのラーデクの見解は受け入れ難かった。レーヴェントロウはドイツ民族自由党 (Deutschvölkische Freiheitspartei DVFP) に属して、「民族共同体」を主張していた。「ライヒスヴァルト」(Reichswart) 誌上の回答「ラーデクとともに」の中でこういつている。民族体 (Völksher) には階級は存在しない。手工業者の敵ではないし、頭脳労働者と肉体労働者の団結こそもっとも好ましいことだと思う。わたくしは人々をひきぬこうとする共産主義者の試みには反対するし、また資本のインターナショナルにも反対する。民族運動は今や十分強化されたから「民族ポリシエヴィズム」の危険をおかすことなしに「協働」という思想を復活させたい。

「われわれ民族主義者は資本主義に対する誠実かつ根本的な闘士である。資本主義のインターナショナルは民族の不倶戴天の敵である。……ラーデクよ、もしそのような協働を行なう用意があるなら、言葉でなく、行動で示されたい……われわれ民族主義者は予断なしに何処からのものであろうと援助を受け入れる。しかしそのためわれわれの民族的「本質」を放棄し、あるいは損なおうとは考えない」⁴³⁾

ドイツ共産党幹部で右派のパウル・フレーリッヒ (Paul Frölich) は「レーヴェントロウ伯への回答」の中で、答えている。レーヴェントロウの階級概念の否定と民族的反資本主義の間には矛盾がある。民族に誠実であろうとするなら「戦線をかえる」必要があり、反動と手を切らねばならない。フレーリッヒはいう。

「ひそかな敵意なしにわれわれとともに一步 (ein Stück Weg) 前進することのできるものを、われわれは喜んでむかえよう。労働者に自らを敵対させようとする人々には、プロレタリアートの鉄拳が加えられるだろう」

だが民族主義的組織自身は決して同盟を申し出なかった。「ローテ・ファ

43) Reichswart Nr 26. 30. 6. 23. Mit Redek?!

ーネ」は7月25日の特別号「労働する中産層にドイツの官吏や農民に」で、「民族主義的反動的デマゴギーにとらえられている」すべての人々に呼びかけた。また「ローテ・ファーネ」8月2日号はレーヴェントロウに紙面を提供し、かれの第二の論文「一步前進？」を掲載した。レーヴェントロウはいう。資本主義に対立しているのは工業労働者だけでなく、自ずから資本主義的所有者の代表でないすべての職能階級の他のすべての層である。かれは「労働者」の把握が共産党員のそれとはちがうと強調した。「さて、今やついに『一步前進』が達成されたなら一連の個々の問題は自明のものとして解決し、とりわけ共産主義者の民族主義者に対する呵責ない闘争も中止されねばならない。しかし反対にこれまでそのような兆候が一切見られない。」⁴⁴⁾

こうして「ドイツの国土」での民族主義者と共産主義者の提携の「一步前進」は夢に終る。そして民族主義者にかわってむしろナチス左派との交流があらわれてくる。

1923年7月にはこれらの五つの論文がラーデクのシュラーゲター論説とともに「シュラーゲター・一つの討論」というパンフレットとして発刊された。10月にも拡大改訂3版が出ている。

読者の便宜のためオトー・エルンスト、ジュデコップフの著書「右翼の中の左派」の中の資料にもとづいて、論争の一覧表を掲げておこう*。

* 論争の一覧表

1923. 6. 15	拡大執行委員会でのラーデク報告
6. 20	〃 ラーデクのシュラーゲター演説
6. 30	レーヴェントロウ伯「ラーデクとともに？」(Reichswart)
	パウル・フリーリッヒ「レーヴェントロウ伯への返答」
7. 2	メラー・ヴァン・デン・ブリュック「空無への旅人」(Gewissen)

44) Rote Fahne, 2. 5, 23, No 176.

45) Otto-Ernst Schüddekopf, Linke Leute von rechts Die nationalrevolutionären Minderheiten und der Kommunismus in der Weimar Republik.
W. Kohlhammer Verlag Stuttgart 1960. S 445 の註32

7. 10	カール・ラーデク「Gewissen への回答」(Rote Fahne)
7. 13	モスクワ青年共産インターナショナルの拡大執行委員会での Radek の演説
7. 30	メラー・ヴァン・デン・ブリュック「現実」(Gewissen)
8. 2	レーヴェントロウ「一步前進？」(Rote Fahne)
8. 3	パウル・フレリッヒ「民族問題と革命」
8. 16 18	ラーデク「共産主義とドイツの民族運動」(Rote Fahne)
8. 28	ソ連との同盟の前提 (Rote Fahne)
9. 2	レーヴェントロウ「分岐点」
9. 26	受け身の抵抗の中止

「ルール占領」とそれにもとづくドイツの危機の中で中産階級の昂揚がみられ、この層が民族主義者の影響下の方向に向かっているのでこの小ブル大衆を傘下にうばいとるための戦術としてとられた「シュラーゲター路線」があまり有効でないことはラーデク自身によって認められている。ラーデクは7月13日モスクワで開かれた国際青年共産同盟の拡大執行委員会での、「資本の攻撃の停滞とコミンテルンの任務」と題する報告の中でつぎのように述べている。

「わたくしのシュラーゲターに関する演説を読んだとき、多くの同志はたしかにいぶかしく思ったことだろう。感情が問題になっているとは誰も信じなかっただろう。わたくしがファシズムにうちまかされた人々に対しては、ただその公職のためにのみ闘っている人々よりも……無限の共感をもつものであることは明らかである。しかし政治的決断において感情は何らの役割も果さない。わたくしはその個人的形式が友人や敵の注目をひいたわたくしの演説によって、ドイツ労働者階級の民族主義的小ブル大衆に対する態度について問題を投げかけたのである。演説の目的は部分的には達成された。……わたくしの突撃は明らかに民族主義的大衆に貫通することはなかった。それ

46) Karl Radek ; Das Abflauen der Offensive des Kapitals und die Aufgaben der

は、上層のサークルに影響を及ぼしただけである。現在、ドイツ共産党の任務はこの大衆への入口を見出すことである。」⁴⁶⁾

協働行動として民族主義者と共産主義者が共通の論壇で演説をし両側の民衆から拍手をうけるということがあった。そのハイライトは1923年8月2日、ドイツ共産党の幹部レンメレがシュトゥットガルトのナチスの集会で演説をし資本主義、ヴェルサイユ条約、協商国権力をはげしく非難しドイツを解放するため「労働者農民政府をつくれ」と要求して大喝采をあげたことだった。8月10日にはドイツ共産党はより大きな集会を開きナチスの代表を招いた。レンメレは再びヴェルサイユ条約と「民主的ドイツ共和国」を攻撃した。ナチスの弁士は民族的・非国際的社会主義を要求して「共産主義が（ユダヤ人の）ラーデク・ソーベルソンに指導され、また他のユダヤ人がよばれる限り、共産主義は民族的になりえないだろう」とのべた。しかし共通の敵とドイツの破壊者、民主主義が打倒されるまで休戦をすることができるとつけ加えた。レンメレが反セミティズムに対する攻撃と資本の打倒のために同盟を要求した。ナチスの代表は「名誉ある敵手」という言葉で討論を打ち切った。このようなナチスと共産党員の交流は共産党よりもナチスの間により大きな混乱をよび、8月14日ナチス指導部は今後の協力を禁止し、共産主義者との共同行動の合法的根拠はありえないとのべるにいたった⁴⁷⁾。

こうしてドイツの国内危機の緊迫化とも相まって、短期のシュラーゲター路線は終りをつげる。「ドイツの10月」——「死産した革命」の到来である。

さいごにこのシュラーゲター路線の意義についてふれておこう。ジノーヴィエフ、ブハーリン、ラーデクラコミンテルンの執行部のとりあげたこの方針は、ルール占領後の民族主義的感情(Emotion)の著しい昂揚に直面して、

Kommunistischen Internationale (Rede in der Erweitern Exekutive der Kommunistischen Jugend Internationale) Dietrich Möler, ibid S 250 KI, 15 Aug, 1923 27号

47) Otto-Ernst Schüddekopf. Linke Leute von rechts Die nationalrevolutionären Minderheiten und der Kommunismus in der Weimar Republik, W, Kohlhammer Verlag Stuttgart 1960 181-183

この感情を「モスクワの起草する政策の道具としようとする試み」として行なわれたものである。またそれは「ワイマール体系の構成要素となっていた社会民主主義よりもむしろ右翼急進派と同盟して行なわれたものである」(レオニード・ルクス)⁴⁸⁾しかしこの路線ははじめから失敗の運命にある政策であった。フレヒトハイムのいうとおり「この民族ポリシェヴィキ的政策は、ドイツ革命の利益にもロシア外交政策の利益にも役立つ筈であった。だがそれは、1930年以降に現われたその再版〔ナチスの台頭をさす〕ほどの効果はあげられなかった。」⁴⁹⁾

アゴスティは妥当にもつぎのように総括している。「先入見のない戦術主義的なラーデクの演説のなかで素描された政策方針には、たしかにいろいろの性質の危険がなくはなかった。さしあたり、ドイツの労働者大衆の見るところでは、司令部なしに、しかも『赤手空拳』でファシストの脅威とたたかう必要性和、反動的民族主義勢力の隊列のうちに同盟者をさぐる機会とを調和させるのは容易ではなかった。第二に、この異例な右翼との『統一戦線』がドイツの革命的プロレタリアートの国際的孤立をまねく危険があった。ドイツの民族主義がどんな形をとって現われようと、不信の念をもってながめる習慣になっている隣接諸国の労働者階級の同情はこれによって遠のいたのである。最後に、社会民主党の指導者たちに、〔ドイツ共産党〕との統一戦線を、ローザ・ルクセンブルクとカール・リープクネヒトの暗殺者との結託だと非難することで、これを拒否する恰好の口実が提供されたことになる。しかし、けっしてラーデクの即席の考案ではなく、ポリシェヴィキ指導者グループの集団的政策決定の結果であつたいわゆる『シュラーゲター路線』が『考案されたのは、ヴェルサイユ条約に反対するためドイツのファシストと

48) Leonid Luks Ertstehung der kommunistischen Faschismustheorie, Studien zur Zeitgeschichte Bd26 Deutsche Verlag-Anstalt 1954

49) Ossip K. Flechtheim Die KDP in der Weimar Republik O・K・フレヒトハイム, 高田爾郎訳「ワイマール共和国期のドイツ共産党」ペリカン社 1986年 170ページ

実際上の同盟を誘発する試みとしてではなく、ヴェルサイユ条約にたいして有効な反対を提供することができるのは、長い目で見れば共産主義者だけであることを明示して、ファシストの隊列を割る試みとしてであった』(カー)。その意味で、それはI C [ミコンテルン] が21カ条以後の革命的権力獲得の準備段階において必要とみなした『大衆獲得』戦略にもとづいてとられる諸形態の一つにすぎなかった。』⁵⁰⁾

それにしても不可解なのは、日本の研究者たちの態度である。主として東ドイツ系の「正統派」文書に依存して書かれた上杉重二郎著「ドイツ革命運動史」上ではシュラーゲターのシュの字も出ていない。

ソ連のマルクス・レーニン主義研究所の共同労作として1969年に出版された「共産主義インタナショナルー歴史」(村田陽一訳「コミンテルンの歴史」大月書店)では、これまた一言半句ものべられていない。

村田陽一編訳「コミンテルン資料集」第2巻では、訳註の中で「ツェトキーン」の報告にたいする討論は、6月21日おこなわれた。ラーデクは、その演説のなかで、ルール地域で占領軍にたいするテロル行動をおこなったかどでフランス軍当局によって銃殺されたファシスト将校レーオ・シュラーガー「[まま、]」の死にふれて、ドイツの民族的利益は大資本の側に立つことによって守られず、労働者階級と協力し、ソヴェト権力と同盟することによってのみ守られる、シュラーガーの同志たちがこのことを理解しなければ、シュラーガーは無への遍歴者となるだろう、と述べた。この演説は、ブルジョア歴史学者たちによって、共産主義者とファシストの同盟の政策のように歪曲されたが、ラーデクの真意は、労働者階級のみが民族的利益の担い手であることを強調するにあった。」と指摘してあるだけである。同様に石川捷治「ワイマール共和制期の統一戦線運動」(法政研究2～4合併号)ではまったくふれられず、山田徹「ルール闘争期のドイツ共産党」(神奈川法学18巻3号)でもほんの僅か(8行)ふれられているだけである(48ページ)。

50) アルド・アゴスティー石堂清倫訳「コミンテルン史」現代史研究所184-185ページ